

会議・視察報告

国際シンポジウム『アジア太平洋経済協力：韓国とロシア－国益、役割、展望』

ERINA 調査研究部研究主任 新井洋史

2010年10月13日、14日に、ウラジオストク国立経済サービス大学（以下、「経済サービス大学」という。）において標記のシンポジウムが開催された。今年が、韓国とロシア（当時、ソ連）が国交を樹立して20周年にあたることを記念して開催されたシンポジウムで、在ウラジオストク韓国総領事館も主催者に名を連ねている。（ロシア側では、経済サービス大学及び沿海地方議会が主催者。）シンポジウムでは約20名の発表があったが、このうち韓国からの発表が5名、日本からは筆者も含めて2名、残りはロシアの発表で、中国などその他の国からの参加はなかった。関係者によれば、中国やアメリカにも声をかけたが、参加が得られなかったとのことだった。当初9月に予定されていた日程が、その3週間前になって急きょ10月に延期になったことも影響したのかもしれない。会議参加者数は見たところ約50名であったが、大学の講義の代わりということなのか、時々学生が大挙して入場、退場していた。

シンポジウムには、2つのセッションがあった。それぞれのセッションタイトルは「アジア太平洋経済協力：発展の展望」、「APECのフォーマットにおける運輸、エネルギー、安全保障、エコロジー」であった。特に第2セッションは雑多なテーマを一つに押し込めた感が強く、まとまりに欠けるものだった。ただ、普段あまり聞くことのないテーマを聞くことができたのは興味深かった。

セッション1 「アジア太平洋経済協力：発展の展望」

最初の報告は、ホスト役に当たる経済サービス大学のアレクサンドル・ラトキン教授で、沿海地方と韓国との投資協力について論じた。今後の戦略分野として、石油化学、ガス化学、電力、造船を挙げたうえで、韓国など外国からの投資誘致のためには、土地の無償提供や投資に対するリターンの保証が必要であると指摘した。

続いて登壇したソウル国立大学のシン・ビョムシク教授は、ロシア極東について、最も重要なものは「エネルギー回廊」と「輸送回廊」であるが、その整備、利用はうまく進んでいないとの見方を示した。その原因は、北東アジアにおける政治環境、二国間協力が留まっていて多国間の協力に至っていないこと、及びロシアの本気度に対する不信



感の存在などに求められるとした。

「アジア太平洋統合と将来のAPEC」と題して発表を行った極東国立工科大学のセルゲイ・ペフツォフ教授は、APECの歴史を「官僚的統合」のプロセスと評した。貿易の自由化のみならず、様々な分野での協力を進めるため、各国政府が様々なレベルでの協議の場を設け、年中会議を繰り返している実態を的確に表現していると思う。もともと「非拘束的」な性格を持つ一方、組織の肥大化で硬直化が進むAPECは、状況変化に対応できておらず、今後は、対象分野を広げつつも組織の改革を進めることが重要だと指摘した。

その他の発表をいくつか挙げると、富山国際大学の鈴木康雄教授は北朝鮮問題を取り上げて、中国の役割の重要性を指摘した。極東国立大学のタギル・フジャートフ教授はリーマンショック以降、世界で新たな保護主義の波が起きていることをデータを示して説明した。極東国立大学のアレクサンドル・アブラモフ教授は「2025年までの極東バイカル地域発展戦略」の概要を紹介した。なお、筆者は、自分の発表の中でロシア極東地域がアメリカ西海岸や中国東北部などとの間で広域地域ブロックのレベルで協力を進めていることを重視し、2012年APECのアジェンダに広域地域間協力の強化を加えるようロシアが主導してはどうかと提案した。

このセッションでは、大図們江イニシアチブ（GTI）について議論される場面があった。当初の目標へ向けた前進がほとんど見られないことをもって、期待できないとする

否定的な意見が出された。他方、「図們江プロジェクト」は既に別のプロジェクトに姿を変えており、地域間協力の推進に一定の役割を果たす枠組みとなっていることを評価する意見もあった。筆者も質疑応答の中で、北東アジアにおける数少ない政府間協力の機構であることを評価すべき旨を主張した。

セッション2「APECの様式における運輸、エネルギー、安全保障、エコロジー」

運輸のテーマに関してはロシアから2名、韓国から2名の発表があった。韓国の2名はいずれも交通研究院(KOTI)の研究者であったが、まったく異なる2つのテーマでの発表だった。キム・ヨンホ氏は、APEC期間中の都市交通管制をテーマとして取り上げ、2005年の釜山でのAPEC首脳会議の経験がウラジオストクの参考になるのではないかと述べた。ノ・ホンソン氏は、ロシアが推進している北極海航路を取り上げ、欧州とアジアを最短で結ぶルートが実現することにより、北東アジアが欧州とアジアを結ぶルート上のアジア側入り口としてより大きな役割を果たすことに期待を示した。これに対し、ロシアの2名は沿海地方が持つ運輸拠点としてのポテンシャルについて発表を行った。沿海地方行政のイーゴリ・フルシチョフ産業・運輸局長は、連邦の運輸政策において一体的輸送体系を形成することが政策目標となっており、その中で沿海地方を経由するトランジット輸送を重視していることを説明した。極東海運研究所のミハイル・ホロシャ海運振興部長は、トランジット貨物量の多寡は総合的な輸送サービスの質を表す指標になりうると説いた。その上で、沿海地方など極東では通関なども含めたサービスの質が低いため、年間1,500万ドルものアジア～ロシア極東間の輸送需要が欧州経由ルートに流失しているとの試算を示し、対策の必要

性を訴えた。

エネルギーに関して、サービス経済大学のセルゲイ・セバスチャノフ教授は、「北東アジアにおけるエネルギー安全保障に対するロシアの貢献」と題した発表の中で、ロシアから中国への天然ガス供給交渉が価格がネックとなって時間がかかっていると紹介した上で、来年にはガスプロムと中国石油(CNPC)が契約にこぎつけるだろうとの見方を示した。また、韓国ガス公社のロシア現地法人KOVOS(ハバロフスク市)のイ・チャンソン社長は、シベリアからの天然ガス輸入に向けた準備を進めていることを紹介した。輸送手段としては、パイプライン、液化天然ガス(LNG)、圧縮天然ガス(CNG)の三種類を比較検討しているとのことだった。少し意外だったのは、沿海地方議会のビクトル・ゴルチャコフ議長が、韓国の原子力産業事情について報告したことだった。かつて極東国立大学の学長まで務めた学者だとは知っていたが、専攻が原子物理学だとは知らなかった。

このほか、水産や韓国海軍などに関する報告もあったが、素人としての興味はともかく、専門的バックグラウンドがない中で、内容をよく理解できなかった部分も多い。

総括

2つのセッション終了後、決議文の取りまとめを行った。第1セッション、第2セッションそれぞれのモデレータを務めたセバスチャノフ教授とアブラモフ教授が、上述の筆者の提案など各発言者の要点を拾い出して取りまとめたものをたたき台として議論していった。活発な意見交換を経て、13項目からなる決議文を基本採択した。そして一部の文言の整理などを両教授に一任した上で、最終版が連邦政府や地方政府など関係者に提出されることとなった。ウラジオストクAPECの準備に活用されることを期待したい。